
 創立15周年記念

日本表面科学会の歴史

企画および講演大会の15年の歩み

福田 安生

静岡大学 電子工学研究所

〒432 浜松市城北3-5-1

(1994年9月29日受理)

Activities in the Planning and Annual Meeting Committees between 1981~1994

Yasuo FUKUDA

Research Institute of Electronics,
Shizuoka University
Johoku 3-5-1, Hamamatsu 432

(Received September 29, 1994)

1. 表面科学基礎講座, 表面科学セミナー

企画および講演大会の表面科学会発足以来10年の活動については会誌「表面科学」10巻8号に坂田先生(企画関係)と難波先生(講演大会関係)が詳しく述べられているので, ここでは紙数の関係上あまり詳しくは述べず, 資料を中心に書くことにする。10周年以降で異なる点は基礎講座, セミナーを中心として活躍してきた企画委員会が会員へのサービスとして研究会を始めたことと, 講演大会におけるシンポジウムを講演大会委員と企画委員が共同で立案することになったことであろう。また1990年から会員の強い要望と関西支部の方々のご努力により, 基礎講座を年2回(春(東京), 秋(関西))を行うことになった。

以下に基礎講座およびセミナーの回数と開催日, 参加人数を記す。

表面科学基礎講座	人数
1回(82.6.9-11)	66
2回(83.6.2-4)	47
3回(84.6.6-8)	84
4回(85.6.5-7)	110
5回(86.6.4-6)	185
6回(87.5.20-22)	183
7回(88.5.18-20)	167
8回(89.5.24-26)	210
9回(90.5.23-25)	219
10回(90.11.21-22)	120
11回(91.5.22-24)	187

12回(91.11.21-22)	76
13回(92.5.27-29)	123
14回(92.11.19-20)	107
15回(93.6.2-4)	98
16回(93.11.18-19)	77
17回(94.6.8-10)	128

表面科学セミナー	人数
1回(81.8.3-6)	80
2回(82.7.27-30)	79
3回(83.8.30-1)	52
4回(84.8.28-31)	39
5回(85.7.10-12)	68
6回(86.7.9-11)	39
7回(87.7.1-3)	62
8回(88.6.29-1)	72
9回(89.6.28-30)	42
10回(90.6.27-29)	67
11回(91.6.26-28)	86
12回(92.6.24-26)	50
13回(93.6.23-25)	90
14回(94.6.23-24)	43

基礎講座の講義項目は第8回まで詳しく「表面科学」10巻8号に述べられている。それ以降においても講義項目は大きな変動はなく, 講師に多少の変更がある程度であるので, ここでは詳しくは述べないことにする。セミナーはその時々トピックスを取り上げる関係上, テーマが異なるので以下にそのテーマを示す。

10回: 高温超伝導体薄膜の作成と応用への展望, 11回: 最近の表面科学を活用した触媒設計, 12回: シリコンデバイスの表面と界面, 13回: 走査プローブ顕微鏡によるナノテクノロジーの展開, 14回: SR光を用いた表面分析。

基礎講座は1, 2回までは「表面分析法」という副題で, 3回から7回までは「表面分析の基礎と応用」の副題で行われてきた。1~2回は手探り状態, 3~7回は試験期間でいろんなテーマを試みた期間, 8回以降は副題を「表面・界面分析の基礎と応用」と改め, 講義項目は大きな変化もなく安定期に入ったということができよう。このことは講座への参加者の変化にも現れている。すなわち, 8回以降は年間受講者は200人を越えている。93年は不況を反映して200人には及ばなかったが, 他の学協会の同様の講座・セミナーの受講者を大幅に上回っていたことは, 本基礎講座が世間一般に広く認知されたことを示すものであろう。これもひとえに歴代の企画委員長を始め, 大いに汗をかいた(冷汗もあるが)企画委員諸氏のご努力および会員諸氏のご協力のたまものであり, 感謝にたえない。思い起こせば, 9回では椅子210の会場で三百数十人の受講申込みがあり, 約150人はお断りしたが, 椅子がなくても受講したいという熱心な方々もおり, 断わるのに苦労した時期もあった。このようなこともあり, この年の秋初めて関西(京都)で基礎

講座を開くことになったのである。ここでも約200名の申込があったが、会場の都合で120名で締め切っている。これもバブルのせいだったのだろうか。このように時代の動きに多少左右されることもあるかもしれないが、これもひとつの戒めと受取り、今後ともより充実した企画を会員諸氏に提供できるように企画委員一同努力したい。

2. 表面科学研究会

基礎講座やセミナーは会員のみならず広く表面科学やその周辺領域に興味を有する人達を対象にして開かれてきたが、学会は会員諸氏へのサービスにより努めるべきである、という意見が強くなってきた。そこで会員ならだれでも研究会を主催することができ、会員の参加費を無料にする、という表面科学研究会の設置を会誌を通じて呼びかけた。しかしながらこれまでは企画委員からのみの企画で行われてきたのが現状である。

以下に研究会のテーマ、世話人、開催年月日、参加人数を記す。

- 第1回：「薄膜成長のin-situ観察における最近の成果と展望」(世話人：真下正夫)
1990.1.25, 95名
- 第2回：「VAMAS-SCA(表面化学分析)研究会報告」(吉原一紘)
1990.4.13, 145名
- 第3回：「薄膜形成の基礎過程」(福田安生)
1990.12.12, 80名
- 第4回：「VAMAS-SCA 研究会報告」(吉原一紘) 1991.4.12, 150名
- 第5回：「表面反応の高度制御」(野副尚一)
1992.1.17, 58名
- 第6回 「理論計算は薄膜成長をいかにあきらかにできるかー現状と展望」(真下正夫)
1992.4.14, 35名
- 第7回 「超高真空から極高真空へ」(吉原一紘)
1993.11.4, 50名
- 第8回 「エピタキシーと表面構造」(越川孝範)
1994.4.13,14, 100名
- 第9回 「SIMSの新しい流れ」(工藤正博)
ーTOF-SIMSとSNMSを中心としてー
1994.9.6, 113名

3. 講演大会

講演大会については上に述べたように、第8回大会まで詳しく書かれている。ここでは開催年月日、発表件数、参加者を列記する。

開催年月日	場所	件数	人数
第1回 82.2.19,20	中大理工	29	173
第2回 83.2.9,10	中大理工	27	75
第3回 83.12.6,7	金材技研	26	105
第4回 84.12.6,7	早大	37	116
第5回 85.12.5,6	早大	39	111
第6回 86.12.4,5	農工大	57	188
第7回 87.12.2,3	東工大	70	192

第8回 88.12.2,3	農工大	94	282
シンポジウム「薄膜成長過程」			
第9回 89.11.27~30	早大	95	600
国際シンポジウム「New Developments and Trends in Surface Science」			
第10回 90.12.3~5	機振館	115	250
シンポジウム「超薄膜」			
第11回 91.12.2~4	早大	108	250
シンポジウム「表面反応の素過程」			
第12回 92.12.15~17	早大	127	271
シンポジウム「イオン散乱ー表面原子配列の高精度解析と半導体技術への応用」			
第13回 93.11.30~12.2	早大	112	268
シンポジウム「表面と計算機科学の最先端」			

1回から4回までは表面科学討論会の名称で行われていたが、5回から講演大会と改称した。私の記憶が正しければ、これは清山 元会長のご発案であったと思う。10周年記念号に難波先生がお書きになっているように、発表件数が増えると討論時間が減少するというのも名称変更の理由の一つであったろうと思われるが、討論会では専門家のみが参加するというイメージが強すぎる、これでは表面科学会の特徴である表面を共通とする境界領域の研究者・技術者やこれから表面を研究しようとする若手が参加しにくい、という理由もあったように記憶している。このことは表面科学会の存立および将来にも関係するので、いつも心にとめていなければならないだろう。

この名称変更によるのか時代の流れによるのか、6回大会から発表件数、参加者ともに増加した。1~3回頃は予稿集が薄く背表紙に印刷できないくらいであった。最初のころは企画委員が討論会の世話人であり、招待講演者をよおにも予算がなく、しかたがないので(失礼!)企画委員や理事の先生方に無報酬でお願いし、そのかわり懇親会費を無料ということでご勘弁していただいた。現在では発表件数も増加し、2会場、3日間行われているが、そのぶん発表時間や討論時間が減少し、特徴が失われつつあるのではと、心配である。日数を減らしポスターセッションを取り入れるなども検討する時期にきているように思われる。

以上、基礎講座、セミナー、研究会、講演大会の15年の歴史を羅列し、勝手な感想を述べてきたが、これまでの成果は歴代企画委員長、岡田正和、島岡五朗、坂田亮、御園生 誠、最上明矩、澤田嗣郎、吉原一紘、講演大会委員長、島岡五朗、難波義捷、岩澤康裕、上村揚一郎、高須芳雄、関西支部長、金持 徹、小西文弥、および多数の委員の先生方のご努力のたまものであります。さらに21世紀にむけてより充実することを願って筆をおきます。